二人の英雄物語

ゼンラーマンZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人の英雄物語

【Ｎコード】
Ｎ７８０８Ｚ

【作者名】
ゼンラーマンＺ

【あらすじ】
このお話は主人公と異世界から来た少女が、普通の生活を送りながら共に魔物と戦う。
という流れで書こうと思っていますが、初めて自分以外の方々に自作の小説を読んでいただくとあって、ちゃんと最初の設定通り話を進められるか自信がありません。
稚拙な文章かもしれませんが、温かい目で見守っていただけましたら幸いです。

日常

この背に翼があれば、この空を自由に飛ぶことができるだろう。
なのに何故、人はこんなにも不自由な地上で互いにいがみ合いながら生きてるのだろう。
見上げれば何処までも広がる自由な空間があるのに――――
何故人には翼がない？

流れ行く雲を飽きもせず見ながら考え事…というよりたそがれてると

『――――。』

何処からか女の声が聞こえた気がして部屋の中を見回した。
たいして広くないアパートの中の一室に、自分が今寝そべってるベットと勉強机、少し大きめの本棚、あとはおしゃれに全く関心のない男子高校生には少々大きすぎるタンスくらいしかない純和室。まぁ狭い家だからこんだけあれば殆ど動き回れるスペースは残らないのだが。
改めて見回すまでもなく、部屋の中には自分以外に人はいない。他にもここと同じ広さの部屋が三つあるが、そのどこにも気配はない。
空耳だろうか？それにしてはやけにはっきり聞こえた気がする。
「ま、どうでもいいか。」
そう言って再び空を見上げた。

変わり映えのしない毎日。
ただ学校と家の間を往復するだけの日常。

まぁこんな生活を十年もやってたらさすがに慣れた。今じゃ何も感じない。本当に、何もだ。小さい時は興味の対象は尽きることなく、世界がとても面白いもので溢れているんだと信じていた。
だがいつからだろう…なんだか何を見ても、何をやっても感動したり興奮したりしなくなったのは…
考えてみると最後に思いっ切り笑ったのていつだっけ？
そう首を傾げてしまうくらい昔な気がする。
まぁそれこそどうでもいい事か。
取り留めのない思考を放棄して、現実に注意を向ける。
「おーい！こっちにボール寄越せ！」
「バーカ。下手な奴は引っ込んでろ！」
「うわ…ちょっと傷付いた…。」
まずそんな会話が耳に入り、次いで何とも楽しそうにクラスメイトがサッカーをしている姿が目に入った。
そんな中俺はゴールネットに背中を預け、目の前で繰り広げられる熱戦を傍観している。
一応授業中ではあるのだが、正直言ってあんな風に和気あいあいとした雰囲気は苦手だ。
体育教師が見てないのをいいことにこうやってサボらせてもらっている。
「だいたい授業開始と同時にいなくなる教師ってどうよ？…なぁ桐生？」
「ん？あぁそうだなー。」
隣でやる気ゼロのキーパーを演じてるクラスメイトが話し掛けてきたので適当に相づちを打っておく。授業始まってまだ１０分も経ってないし。
何もせずにこうやってぼーっとしてるのも暇すぎるしな。
『―何を求める―。』

「！？」

急に俺の耳元で凛とした女の声がしたのに驚いて、慌てて背後を振りかえる。

「……誰もいない…。」

「ん？どうかしたか、桐生。」俺の様子を訝しみ、隣で眠そうに突っ立っていたあのやる気ゼロのキーパーが不思議そうな目でこっちを見て言った。

「…いや。何でもない。」

俺は平静を装い、またゴールネットにもたれかかった。

なんだか前もこんな事があった気がする。そんな事を考えながらぼーっと目の前の光景を眺めた。

１１月の秋空の下、楽しそうにボールを追っかけている彼等の姿がいつもより遠く感じた。

「あー…暇だなー。」

一人で坂道をとぼとぼと下りながら思わず漏らした。周りには誰もいない為気にする必要はない。

今日は体育の時間に妙な声が聞こえた以外は、いつもと変わらずに１日が過ぎ去った。

「しかし何でこんなに気になるんだ？」

あの時聞こえた声が何故か頭から離れないのだ。そのせいでその後の授業は上の空。普段滅多にない事だが何度も先生に注意された。

「ま、キレイな声だったけどさ…それだけじゃないよなぁ。」

何故こんなに気になるのか分からないが今も意識の大半をあの声に占められてる。

やばい。自分の頭が心配になってきた。

精神衛生上の問題がありそうな気がしてきたので、何か気を紛らわせる物はないかと辺りを見回すが、殆ど毎日同じ道を通ってるせい

で全く新鮮味がない。
都会でも田舎でもない街の外れにある道路を歩く俺。目に入る物と言ったら木、草花、民家、車等。だが不思議な事に目の届く範囲内に自分以外の人影はない。
「そういや本当に誰もいないな。というか車すら通らなくなってきてるんですが。」
市街地から外れているとはいえこのあたりはそれなりに交通量が多いのだが、今では一台も見かけなくなった。
人の気配が完全に失せ、不気味な静寂がこの一帯を支配する。
おかしい。授業が終わってすぐ家路についたため現在時刻はせいぜい四時半ぐらいだろう。あと１０分も歩けば家に着く。なのにこんなに静かなのは明らかに異常だ。田舎の山中でももう少し賑やかだろう。なのに俺の足音以外全く聞こえない。
さすがに少し不安になって足を止め、何か聞こえないかと耳をすましていると、急に後ろから声がした。

『此処には私とお前の二人しかいない。探したところで何も見つかりはしないぞ。』

聞き覚えのある凛とした女の声。
恐る恐る振り返ると、そこにはファンタジー系のゲームに出てくる魔術師が着るような黒い裾長のローブに身を包んだ女がこっちを向いて立っていた。
「はじめまして、魔法使いのお嬢さん。」
見たところ俺とそんなに歳が離れてるとは思えなかったので、気安く話し掛けてみた。パッと見ただけでそうと分かる程の美少女だしな。俺に何か用があって話し掛けてきたのなら、少しでも話しやすい空気にしたかったのだ。実は女子が少し苦手なんだよね。
だが少女はその整った顔を不快そうに歪めた。
あれ？なんかまずった？

「…私を馬鹿にしているのか？もしそうなら貴様をこの場で塵も残さず消滅させるぞ」
どうやら先の俺の発言は彼女的には死亡フラグだったらしい。
「いや、そんなつもりはなかったんだ。気に障ったのなら謝るよ。」
そうやって釈明すると、幾分表情を和らげてくれた。
しかし…改めて見ると本当にキレイだ。外国の子なのだろうか、銀色の髪は腰のあたりまで伸びていて、毛先まで手入れが行き届いてるようだ。目鼻立ちがすっきりしていて、体もローブを着ているので詳しくは分からないがスレンダーな体型のようで、多分こんなにキレイな子に会ったのは生まれて初めてだろう。
こんな子が俺なんかに何の用だろうか？
俺は自慢ではないが存在自体が平凡だ。勉強もスポーツも容姿も全て平均点レベル。特技もこれといってないが、かといって苦手な事も特にない。やれと言われれば大抵の事はできる。
そんな俺と彼女のような美少女との間に接点があるとは思えないのだが…
俺がこの状況を不思議がっていると彼女からその答えはもたらされた。
「まぁいい。お前は私にえらばれたのだ。この世界を守るための防人として」
「えっと…防人（さきもり）？世界を守る？」
「そうだ。私と共にこの世界を《アーク》の魔物共から守って欲しい」
曰く自分達の世界（アーク）では最近、魔物の大量発生が起きて国の殆どを滅ぼされた。残った人類は魔物から隠れて細々と生きている状態だ。
このままでは遠からず人は一人残さず滅ぼされるだろう。
そこまで聞いて俺は話の腰を折らせてもらった。どうしても言いたいことがあるのだ。

「君達が住んでいる世界の名はアークで間違いないんだよね？」
「そうだが？」
「そして魔物が湧いてきたのもアークだよね？」
「…そうだな。」
俺は笑顔で彼女を問い詰める。
「それじゃあその問題は君達が自分で解決するべきじゃないかな？
というかさっき君は魔物がさもこの世界まで侵略してくるような事言ってたけどどうしてそんな事分かるの？そして最初の話と後から聞いた話ではなしが微妙に違う気がするのは俺だけ？最後にもう一つ、そんな話をどうやって信じろと？」
言っておくが俺は別に彼女を責めているわけではない。
ただ面倒事はごめんだと思ったから話の優先権を無理やりでも奪って、一刻も早く平穏な日常生活に回帰したかったのだ。
正直いくら美少女でも延々電波な話に付き合うのも馬鹿らしい。
「ふむ…やはり信じておらんようだな。ならばまずは証拠を見せよう。」
何やら思案顔だったのが次の瞬間にはまばゆい笑顔に変わってそう言った。
グッとくるものがあったのは否定しないが、なにがそんなに楽しいのだろう？
「正直これであっさり信じられたらどうしようかと思っていたのだ。私の主になるのなら、その様な体たらくではこの先不安だからな」
「はぁ…さいですか…」
もうついていけません。何故見ず知らずの人間に試されなければならないのか。これはもしかして何処かの研究所の心理実験か？
だったらさっさとネタバレして欲しいのだが、ここで帰ってこの子を困らせるのも申し訳ない気がする。仕方ない。もう少しだけ付き合ってやろう。
我ながらどうかしてると思ったが、不思議と嫌な気分ではない。そんな事を考えていると、不意に見当違いの方向から少女の声がした。

「おい。そんな所に突っ立ってると殺されるぞ」
「は？何に？」
「どうせ言っても信じまい？いいからこっちに来い」
いつの間にか近くのブロック塀に身を寄せていた少女が、こっちに向かって手招きしている。
今度は隠れんぼか？
そう思ったがとりあえず少女に倣って塀に身を寄せた。とはいっても、鬼のいない隠れんぼなんかしてても面白くない。暇つぶしに喋っとくか。
「そういえば自己紹介してなかったな。俺は桐生耕平。君は？」
「フランチェスカ。フランでいい。」
「それじゃあ俺も耕平で」
そのまま雑談を続けようと口を開くが、それはフランに制止された。
「…来るぞ」
次の瞬間、何かの足音がこっちに向かって近づいてきていることに、気がついた。もしかしてこの足音の主から隠れているのだろうか？だけど明らかにこの足音は四足歩行の動物のものだ。
「犬が飼い主から逃げてきたのか？」
「そんな可愛いものじゃない。見てみろ」
促されるままに塀から顔を出して、通りの向こうをうかがった俺は愕然とした。
「何だあれは……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7808z/

二人の英雄物語

2011年12月25日03時50分発行